

すべての子どもたちにゆきとどいた教育を

# ゆきとどいた教育をすすめる北海道連絡会ニュース

NO. 12 2016年11月24日 ゆきとどいた教育をすすめる北海道連絡会

## 鶴居村訪問(11月10日)

11月10日、新保事務局長、菱木事務局次長の2名で鶴居村を訪問。国安教育長と懇談を行いました。

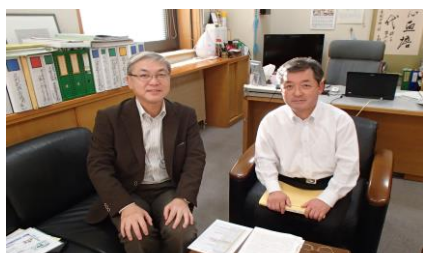
教育長からは「鶴居村には高校がないので、通学バス代の助成をしています。高校生には月1万(高等学校等人材育成支援制度)を3年間助成しています。特別支援教育支援員の給与は国から80万程度しかこないの、200万に増額して6名配置しています。そして、中学生までの医療費無料化を先進的に行って来ました」と語ってくれました。

鶴居村が子どもたちのために教育条件整備を重

視してきたことがよく分かる懇談でした。

教育長から複式学級についての

要求があり、「16人以下が複式対象は厳しい。子どもがさらに減り、中学校が複式になると3人の教師が減ってしまう」。複式学級の基準を改善してほしいということでした。後半、私たちの教育キャラバンの趣旨を伝え、懇談を終えました。



## 「ゆきとどいた教育をすすめる地域学習

### 会 in 釧路」 11月10日に開催

10日の夜、釧路市生涯学習センターにおいて、「道民の会・ゆきとどいた教育」共催で、「考えよう！地域にとって、学校とは？」と題して、学習会を開催しました。平日の夜にもかかわらず、全釧路教組・高教組根釧支部・大学関係者・市民が20数名集いました。「ゆきとどいた教育をすすめる北海道連絡会」が主催する学習会を地方会場で行ったことは貴重な機会であり、このような学習会を今後も継続していくことが大切です。

教育大学釧路校の廣田 健さんから「北海道・道東の地域教育の現状と課題」を報告していただきました。「相対的貧困家庭は保護者もダブルワークで働く方が多く、子どもの世話ができない、そして、社会参加ができなく孤立している。僻地の小規模校が増え、バス通学では放課後活動ができない。学校が消えると地域の担い手も減ることになる。学校が集落をつくっているのです」と語りました。

その後、学校の教員2名から報告があり、高校の先生からは、「基礎学力が不足している子、不登校による学習の遅れている子が増加している。遅刻、欠席、早退の場合、家庭から連絡がなく、苦慮している。その背景には、母子・父子家庭が多い学級のため、保護者も生活で困難を抱えていることがうかがえる」などと報告がありました。

義務制の先生からは、「教材費などの学校予算を増やしてほしい。圧倒的に予算が足りない。業者テストを購入する場合、保護者負担を減らすために買わない教科もあるが、それでも払えない保護者がいる。土曜活動日が数年前から入っているが、非常に不評です。土曜活動日を決めるのなら、学校の総意

で決めてほしい」などと報告がありました。

その後、参加者との交流があり、道



民の会世話人の河野さん(北星学園大学)のまとめでは「保護者と教職員がつながるためには、お茶を飲みながらゆったりした気持ちで話せる機会が必要ですね。先生方には、学校の敷居が高くなっていないかどうか考えてほしい。今のお母さん方は、自己責任として子育てを一人で(父親の帰宅が遅いなど)背負っている困難な状況もあるのです」と述べ、参加者も考えさせられる発言でした。